

日本フランス語フランス文学会

2011年度秋季大会

2011年10月8日(土)・9日(日)

(本大会は小樽商科大学創立100周年を記念して開催されます)

会場：小樽商科大学 〒047-8501 小樽市緑3丁目5番21号

大会本部：小樽商科大学言語センター事務室

TEL：0134-27-5280 FAX：0134-27-5282 MAIL：otaruautomne@gmail.com

当日連絡先：0134-27-5280

■お車でのご来場はご遠慮ください。■お問い合わせはFAXまたはメールでお願いいたします。

■大会費等は同封の振込用紙にて、9月22日(木)までにお振込みください。

■大会参加にあたり、招請状の必要な方は学会事務局までご請求ください。

■委員会・役員会につきましては、学会事務局よりご連絡いたします。

大会費：1,000円

昼食：会場周辺の飲食店は数が非常に限られており、10月8日(土)、9日(日)両日とも学内食堂は休みですので、お弁当(1,000円)をご用意します。ご希望の方はお申込みください。(会場周辺にコンビニ等はありません)

■弁当配付場(10月8日、9日とも)：3号館正面入口ロビー

■一般控室：3号館104教室

■賛助会員展示会場：3号館2階学生控室および周辺ロビー

第1日 10月8日(土)

受付 12:00 - 17:00 3号館正面入口ロビー

開会式 13:30 - 13:50 3号館210番教室

司会 小樽商科大学 尾形弘人

開会の辞 小樽商科大学 江口 修

開催校代表挨拶 小樽商科大学学長 山本真樹夫

会長挨拶 京都大学 吉川一義

研究発表会 3号館(詳細はプログラム3ページ)

第1部 14:00 - 15:30

第2部 15:45 - 16:45

懇親会 19:00 - 21:00

会場：にしん御殿 小樽貴賓館

〒047-0047 小樽市祝津3丁目63 TEL: 0134-24-0024

会費：9,000円(学生・発表者6,000円)

会場へのアクセス：3号館付近より送迎バス

17:00、17:30、18:00の3便

第2日 10月9日(日)

受付 10:00 - 14:00 3号館正面入口ロビー

特別講演 10:30 - 12:00 3号館210番教室

Jean-Luc Steinmetz (Professeur émérite, Université de Nantes)

*Explorations et intentions :*

*le pôle intérieur de l'œuvre chez quelques poètes majeurs du XIX<sup>e</sup> siècle*

司会 東京大学 中地義和

ワークショップ 13:00 - 15:00

I・・・3号館211番教室

II・・・3号館213番教室

III・・・3号館214番教室

(詳細はプログラム4ページ)

総会 15:10 - 15:50 3号館210番教室

議長 東京大学 星埜守之

閉会式 15:50 - 16:00 3号館210番教室

会長挨拶 京都大学 吉川一義

閉会の辞 小樽商科大学 高橋 純

日本フランス語フランス文学会 2011 年度秋季大会  
研究発表会 プログラム 10月8日(土)

	第1部 (14:00-15:30)	第2部 (15:45-16:45)
<b>A 会場</b>  <b>3号館 211 番教室</b>	語学	18世紀
	司会：阿部 宏 (東北大学) 1. L'énigme des énoncés d'identité de type «a=b» : Une solution grammaticale 酒井智宏 (跡見学園女子大学助教) 2. 疑問発話を中心としたフランス語イントネーションの知覚 —日本人学習者とフランス語母語話者の比較— 安藤博文 (パリ第三大学博士課程)	司会：玉田敦子 (中部大学) 1. ルソー『新エロイズ』における音楽劇的要素 — 第4部書簡17の自然描写をめぐって — 白川理恵 (上智大学大学院博士後期課程)
<b>B 会場</b>  <b>3号館 213 番教室</b>	19世紀1	19世紀3
	司会：丸岡高弘 (南山大学) 1. アルフォンス・ド・ラマルティエスにおける歴史の意味 大野晃由 (東京大学大学院、日本学術振興会特別研究員) 2. ヴィクトル・ユゴーの作品における文字 数森寛子 (千葉商科大学非常勤講師) 3. 「監獄法」と『レ・ミゼーブル』— サン・ミッシェル修道院の規則に もたらされた加筆・修正から 梅澤 礼 (上智大学研究補助員)	司会：小野 潮 (中央大学) 1. スタンダールの小説における描くことの問題 — 『フェデーレあるいは拝金亭主』を中心に — 小林亜美 (神戸大学大学院博士課程修了) 司会：北山研二 (成城大学) 2. 「知識人」アルフレッド・ジャリの誕生 — Cycle d'Ubu にみられる政治意識の変遷について — 合田陽祐 (日本学術振興会特別研究員P.D)
<b>C 会場</b>  <b>3号館 214 番教室</b>	19世紀2	19世紀4
	司会：北村 卓 (大阪大学) 1. 纏う詩へ — ボードレールとマラルメ 原 大地 (慶應義塾大学准教授) 2. 同時代人たちから見た、ボードレール『人工天国』 余語毅憲 (パリ第四大学博士課程修了) 3. 彫刻と舞踏 — ボードレールにおける身体形容— 小倉康寛 (一橋大学大学院博士後期課程)	司会：吉田正明 (信州大学) 1. ヴェルレーヌにおける喜歌劇の実践と影響 倉方健作 (東京理科大学非常勤講師) 2. 『イリュミナシオン』自伝的作品群における「私」と語りの構造 について 深井陽介 (東北大学非常勤講師)
<b>D 会場</b>  <b>3号館 303 番教室</b>	20世紀1	20世紀5
	司会：長島律子 (滋賀県立大学) 1. 子供時代の危機—ジョルジュ・ベルナノス『新ムーシェット物語』 に見る20世紀初頭の青年像 谷口智美 (関西大学非常勤講師) 司会：山田広昭 (東京大学) 2. ヴァレリー『われらの運命と文学』における現代世界の予測不可能 性の表象 木村正彦 (首都大学東京非常勤講師)	司会：山田広昭 (東京大学) 1. 「感情の哲学」 —アランの情念論を準備したもの— 新田昌英 (東京大学人文社会系研究科研究員)
<b>E 会場</b>  <b>3号館 401 番教室</b>	20世紀2	20世紀6
	司会：有田英也 (成城大学) 1. ピエール・ルヴェルディと「現実のリリスム」 山口孝行 (筑波大学大学院博士後期課程) 2. セリヌにおける理想とユーモア 杉浦順子 (神戸大学非常勤講師)	司会：竹内修一 (北海道大学) 1. アルベール・カミュの青春の思想 — 世界志向と石化志向基軸の思想— 佐藤卓司 (北海学園大学非常勤講師) 2. アルベール・カミュ『手帖』第1ノートにおける「クロノロ ジーの問題」について 高塚浩由樹 (日本大学准教授)
<b>F 会場</b>  <b>3号館 406 番教室</b>	20世紀3	20世紀7
	司会：荒井 潔 (防衛大学) 1. アントナン・アルト—書簡に見る時間性について 荻谷俊宣 (早稲田大学大学院博士後期課程) 2. 神秘主義と操り人形 — アルト—におけるモリス・メーテルラ ンク読解 堀切克洋 (東京大学大学院博士課程) 司会：星埜守之 (東京大学) 3. ルネ・マグリットの「太陽の時代」再考 — 光と闇、「見る」ことのシュルレアリスム — 吹田映子 (筑波大学大学院博士後期課程)	司会：米谷巍洋 (近畿大学) 1. ロブ＝グリエにおける共同製作という試み — 『囚われの美女』を中心に— 的場寿光 (立命館守山高等学校非常勤講師) 2. ナタリー・サロートによる言葉ちのドラマ—最後の劇『つま ウイ ノン らぬことで (諾でも否でも)』における最初の試み 武田はるか (東京大学人文社会系研究科附属次世代人文学 開発センター研究員)
<b>G 会場</b>  <b>3号館 407 番教室</b>	20世紀4	20世紀8
	司会：高橋信良 (千葉大学) 1. サミュエル・ベケット『ワット』における「無知」の問題 — ゲーリングスとバタイユを手掛かりに— 宮脇永吏 (学習院大学大学院博士課程、日本学術振興会特別研究員) 2. ベケット『名づけえぬもの』の<戯曲>的側面 鈴木哲平 (東京理科大学非常勤講師) 3. ベケット『メルシエとカミエ』における「空間」—三つの煉獄を めぐって 菊池慶子 (早稲田大学助手)	司会：石川清子 (静岡文化芸術大学) 1. 父になれぬ息子たち— ムーロード・マムリの『忘れられた丘』 および『義人の眠り』について 茨木博史 (四日市大学非常勤講師) 司会：渡辺芳敬 (早稲田大学) 2. ミシェル・フーコーにおける「残余の論理」 — 歴史と文学をめぐって — 坂本尚志 (ボルドー第三大学博士課程)

2 日目 (10 月 9 日)

午前の部

特別講演 10 : 30 – 12 : 00

3 号館 2 1 0 番教室

Jean-Luc Steinmetz (Professeur émérite, Université de Nantes)

司会 中地義和 (東京大学)

*Explorations et intentions :  
le pôle intérieur de l'œuvre chez quelques poètes majeurs du XIX<sup>e</sup> siècle*

Une première partie de cet exposé tentera de réfléchir sur les termes d'explorations et d'intentions en les situant dans le champ littéraire : d'une part, la reconnaissance du territoire constitué par l'écrivain (avec les terres inconnues présumables), d'autre part, les projets plus ou moins affichés par lui. Ces deux éléments qui souhaiteraient réactiver la lecture des œuvres considérées aussi sous le rapport de la relation biographique, aideront à percevoir l'hypothèse d'un « pôle intérieur » que semble supposer l'œuvre d'un écrivain, envisagée dans sa totalité exprimée et son possible pressenti : un lieu magnétique et secret, vers lequel, plus ou moins consciemment, il est entraîné et qui se révèle explicatif après coup.

L'exposé se développera ensuite selon des exemples pris dans l'œuvre de quelques poètes français: Nerval, Mallarmé, Lautréamont/Ducasse, Rimbaud, Baudelaire, en imaginant pour chacun le « pôle d'attraction » - indiqué par la femme du poème *Fantaisie* chez Nerval, par l'image d'Hérodiade chez Mallarmé, par l'impersonnalité chez Lautréamont/Ducasse, par l'accession au « génie » chez Rimbaud, par la configuration du moi et la damnation chez Baudelaire.

Une troisième partie exposera un certain nombre d'objections possibles à ces mises au point provisoires. Elle conclura sur la littérature mise à la question et sur l'illusoire communication de la fiction. La vérité de sa démarche n'est pas dans ce qu'elle pourrait trouver, mais dans son acte même.

午後の部

ワークショップ 13 : 00 -15 : 00

ワークショップ I フランス・ルネサンス文学に見る暴力の表象とその周辺

3  
号  
館  
2  
1  
0  
番  
教  
室

コーディネーター (兼パネリスト) : 久保田剛史(青山学院大学)  
パネリスト : 濱田明(熊本大学)、平野隆文(立教大学)

20世紀に対し「大量虐殺の世紀」や「大殺戮の時代」というレッテルが貼られるに至って久しい。しかし、スティーブン・ピンカーが明らかにしたように、いわゆる原始的な戦争に於ける男性死亡率は、10パーセントから60パーセントに達し、平均値は30パーセント前後に及ぶのに対し、二つの世界大戦を含めたアメリカ合衆国とヨーロッパのそれは、数パーセントの域を出ていない。言うまでもないが、戦争や虐殺を正当化するのが、ピンカーの目的ではない。暴力への指向を人間の普遍性に求める民族誌学者たちの説を補充するのが、彼の意図する処である。

ルネサンス期の呼称を与えられるフランス16世紀は、周知の通り宗教分裂を惹起した時代でもあり、特にその後半は宗教戦争という内戦が、残虐かつ暴戾なる殺人や処刑を誘発し、相当の「(男性)死亡率」を記録していた可能性は否めない。同時に、宗教的大義に起因する残害や殺戮に於いては、自らのドグマによって正当性を担保される分、その残酷さには拍車がかかる。こうした事態は、敵側の残虐さを告発する文書やパンフレの大量生産へと直結し、同時に、味方の最終的な勝利を、天界に於ける勝利として表象する文学をも生む。濱田は、宗教戦争を背景に記されたロンサル『当代の悲惨を論ず』とドービニエ『悲愴歌』の読解を通して、カトリックとプロテスタントの暴力が、宗教的な立場の差異に呼応しつつ展開される様子を、聖バルテルミーの虐殺、偶像崇拜、異端審問などの内的力学を腑分けしつつ論じる。さらに、暴力の対象が、宗教的な意味を帯びた身体である点にも着目する。

平野は、現実の阿鼻叫喚を無化し、「戦争」を「戦争ごっこ」として重層的喜劇に昇華したラブレーの技法が、世紀後半のヴェルステガンやクレスパンの著作に至り、単層的な嗜虐描写へと文学的に退転する経緯を辿る。その上で、聖体拝領や殉教の精神を巡るイデオロギー的対立が、両陣営の残虐行為に甚だしい懸隔をもたらすと同時に、テヴェエやド・レリーたちの旅行記に於けるカンニバルの表象にも影を落としていることを指摘する。また、こうした世界劇場に遍在する人間の悲惨が、「悲劇的物語群」に伏在する魂の抑圧や「驚異的物語群」に刻印された身体の抑圧へと連結していく様子にも触れる。久保・モンテーニュが、宗教戦争が近親憎悪を胚胎しているが故に、その暴力が狂信的な激越にまで達する可能性を既に見抜いていたその慧眼に着目しつつ、『エッセ』に於ける内戦の表象の特徴に迫る。同時代の政治的事件に言及しつつもあくまで古代の戦争に関する逸話を通して、残虐さを暗示的に示すモンテーニュの至芸が、単層的正義や描写から文学的真実を救済している様子を考察する。

日本フランス語フランス文学会 2011 年度秋季大会

ワークショップ II オラルヒストリーの「事実」と「真実」

3号館  
213番教室

コーディネーター (兼パネリスト) : 高橋純(小樽商科大学)  
パネリスト: 島村 輝 (フェリス女学院大学)、高橋信良(千葉大学)

まずここで言うオラルヒストリーとは、回想録やエッセーや物語といったジャンルの違いを問わず、実在の人物が実体験するかまたは目撃者として立会った出来事(その出来事についての解釈も含めて)伝える報告であると理解する。するとオラルヒストリーには、語り手が回想する(解釈する)という営みを通じて、客観的な「事実」としての出来事と、語り手にとってその出来事がもつ「真実」との間には、作弄的なものであれ非作弄的なものであれ、おのずとずれが生じてくる可能性がある。

例えば、1933年2月20日に小林多喜二が警察権力の手で拷問虐殺された事を知ったロマン・ロランが抗議文を書き、これがフランス共産党機関紙『ユマニテ』に掲載されたという、戦後日本で語り継がれた逸話はロマン・ロランと多喜二を「反戦平和の文学」という合言葉で結び付けることに与ったが、実はこの逸話は事実と相違していることが今では明らかとなっている。

アントナン・アルトーは1936年にメキシコに赴き、その原住民タラフマラ族の儀式に立会った事が彼の言語観、演劇観に決定的な影響を与え、その後彼は死の直前まで自らの「タラフマラ体験」を反芻し続けることとなり、その成果は一冊の本にまとめられてわれわれ読者の手に残されている。しかし後年ル・クレジオは、アルトーが同行したことになっている公式の人類学調査団の記録は公文書館に残されていないと明かし、原住民の言葉もスペイン語も話せなかった「アルトーがどのようにしてインディオと意思疎通ができたか、少なくともペヨトルの儀式に立会うことができたのか不明なのである」と疑問を投げかけている。

こうした体験報告に現れる表の「事実」と裏の「真実」のずれはわれわれのテキスト理解にどのような影響を与えるのか与えないのか。こうしたずれは、テキストにはそのテキストの成立の契機となったレフェランとしての「外部」があることを仄めかしている。では、そのテキストの真実性を担保する「外部」が信憑性を失うとき、テキストの解釈の自律性(自立性)はいかにして保たれるのだろうか。この点を考察するのがこのワークショップの目的である。

ワークショップ III 科学としての言語学が斬り捨てた問い —言語科学の哲学に向けて—

3号館  
214番教室

コーディネーター (兼パネリスト) : 酒井智宏(跡見学園女子大学)  
パネリスト: 山口裕之(徳島大学)、守田貴弘(東京大学)

チョムスキー以来、言語学は科学であると考えられてきた。そして、言語学の教科書も、いささか誇らしげに、自らを科学と称してきた。「言語学の論文は [...]自然科学の論文に性格に近い。一定の訓練を受け、その訓練を消化した人間ならば誰でも書くことができる。」(郡司隆男 (1997)「言語科学の提唱」『言語の科学入門』岩波書店: 135)

ここで一つの疑問が生じる。いったい、誰でも書ける論文を書くことに言語学者が誇りを見出すことは可能なのか。言語学者の誇りは「一定の訓練」の中に見出されるに違いない。「一定の訓練を受け、その訓練を消化した」第一線の言語学者はどんな論文を書くようになるのか。「この例は、物理的世界を客観的に分析した場合の『意味』と、言語の構造に反映される『意味』とが必ずしも一致しないことを示している。[...]意味上の主語[...]は客観的に見れば意図的な行為者であるけれど[...]言語構造の中ではその意図性は捨象され[た]。[...]主語が実際に意図的に行動したかどうかという問題は超越して、『主語が現れた / 立っていた』という事実だけが描かれている。」(影山太郎 (1996)『動詞意味論 — 言語と認知の接点』くろしお出版: 38-39) 率直に言って、このままでは意味不明である。物理的世界における「現れた / 立っている」行為(者)と独立に、あるいはそれを「超越」して、言語の構造の中に見出される「(非)意図性」とは何なのか。こうした荒唐無稽な「意味」を語れるようになることが言語学者になるための「一定の訓練」だとすると、言語学者は他分野の研究者から冷たい視線を浴び、独りよがりな誇りしか持てなくなるだろう。

科学としての言語学では、「『意味とは何か』[...]などといった近代哲学における重要な諸問題は、科学的に語りえぬものについては沈黙せよというわけで、あまり表立って扱われなくなってしまうきらいがある。」(山口裕之 (2005)『人間科学の哲学 — 自由と創造性はどこへいくのか』勁草書房) 言語学の研究を、誰にでもできるものではなくかつ、荒唐無稽でもない、真に創造性に富んだ営みにするためには、言語学の手法を根本的に問い直す視点、科学哲学のまなざしを持って言語学を眺める「言語科学の哲学」が必要である。「哲学とは自らものを考えるための知識と技術である。[...]哲学において形作られるのは自分自身であり、それを一度壊し、また作り直していくという作業の繰り返しこそが哲学の実践である。」(『人間科学の哲学』: 245)

このワークショップでは、言語学を、そして言語学者自身を、一度壊し、また作り直していくという作業に取りかかりたい。

宿泊・航空券セットプランのご案内

秋の北海道は観光シーズンで、小樽も人気のスポットのため、航空機、宿泊とも大変な混雑が予想されます。大会実行委員会といたしましても、大会参加者の皆様の便宜を図るよう、旅行代理店に宿泊・航空券の手配を依頼してはおりますが、部屋数には限りがあります。また、大会期間中は連休中でもありますので、お早めの手配をお勧めいたします。詳しくは学会ホームページあるいは大会実行委員会ホームページをご覧ください。

申込締切: 平成 23 年 9 月 5 日 (月) ※確保している部屋数がふさがり次第、締め切りとさせていただきます。